2015年（平成27年）10月10日（土） 日刊木材新聞

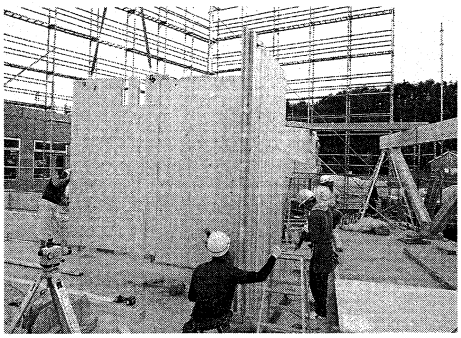
上信越版

ノルン水上スキー場

杉CLTでゲートハウス

内装に使い意匠性を重視

ノルン水上スキー場（群馬スノーアライアンス、群馬県利根郡）で、国産杉のCLTを使ったゲートハウス新築工事が進められている。工期短縮と杉の意匠性を重視したプロジェクトで、CLTをそのまま内装仕上げ材とすることでコスト削減を図っている。群馬県内の民間施設でCLTを使った物件は今回が初めてとなる。



CLTをそのまま内装仕上げ材として使うゲートハウスの建設現場

建設中のゲートハウスは木造2階建て、建築面積303・75平方㍍、延べ床面積487・14平方㍍。CLT製造は山佐木材（鹿児島県肝属郡、佐々木幸久社長）が行った。壁にCLT厚さ90㍉（3層）、天井に同150㍉（5層）、スラブはスパンの関係から杉集成材厚板パネル210㍉を採用した。木材使用量は壁が46・44立方㍍、天井が9・6立方㍍、スラブが113・274立方㍍、合計約170立方㍍。施工は沼田土建（群馬県沼田市）。

壁CLTパネルの室内側は白太で統一され、そのまま内装仕上げとなるビジブル仕様とした。杉材の意匠性の弱点を克服しており、CLTパネルのこうした使い方は国内初と見られる。外壁側は断熱材や外壁材が施されるため、通常の赤身と白太が入り交じった源平仕様としている。

完成予定は12月初旬で、工期が短かったこともあり、CLT工法を採用した。CLTは工場ですべて加工し、鹿児島から群馬まで運んだ。最大サイズは2×3・8㍍、全体で4トントラック・ロング合計8台に上ったが、全く問題なくスムーズに搬入できたという。

設計者の武松幸治氏（E・P・A環境変換装置建築研究所代表）は、「欧州では長さ15～16㍍のCLTが生産され、それを加工する機械もあり、パネルのサイズの誤差も±1㍉程度で生産技術が進んでいる。施工にも考慮されており、工場出荷時にすべてのCLTにつり下げロープが取り付けられ、工事短縮の工夫がされているので施工性も大変高い。CLT工法は施工の段取りが重要だが、国内ではまだこうした情報が行き渡っていない感じがする。つり下げロープ1つでも改善されれば、施工性は大幅に向上するだろう」と話している。